

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 中村 惇二

本論文「宋遼外交交渉の思想史的考察」は、西暦10～12世紀にかけて、北宋が遼（契丹）との名目的な関係をどのように取り結ぼうとしたか、その論理を儒教的な名分秩序論から読み取って分析したものである。

北宋は唐末五代の政治的分裂状態を收拾し、中華本土における統一王朝たろうとした。ところが、それ以前の後晋建国の折の割譲によって遼が長城以南に領土を保有しており、そこを本来は自分に属すべき未回復の土地と認識する。宋遼両国はこの土地をめぐる40年余り敵対関係にあった後、1004年に盟約を結んでから120年間戦火を交えることはなかったが、金の台頭に乗じて北宋が領土の回復を企図して遼を挟撃する。本論文はこうした一連の政治的経緯の背景に存する思想的・文化的伏流を探り出そうと試みている。

論文は以下のような構成をとる。序章「“宋遼外交交渉” 考察の方法」は、この問題を考察するにあたり、近年、東アジアの近代国際関係を分析する2つの先行研究によって提起された概念、“連鎖”と“中華世界秩序原理”とを活用することを宣言する。第一章「“中華世界秩序原理”の理論構成」は、この仮説の概要を紹介した後、筆者によるその宋遼関係への応用について史料に即した説明を行う。第二章「宋朝の“祖宗家法”と“正統性”」は、二代目太宗の帝位継承事情と三代目真宗の封禅儀礼について、帝位の正統性という観点から遼との関係を分析する。第三章「宋遼をめぐる国際秩序問題」は、両国の関係を宋の立場から時期ごとに整理し、それらの政策が表層では異なるものの思想的には自分が中華王朝たることを示そうと一貫していたと論じる。第四章「“宋遼外交交渉”に於ける思想史的諸問題」は、当時の為政者が持っていた儒教的な思惟によれば、両国は決して平等な関係ではなく、序列に大きな意味があったことを指摘する。終章「“宋遼外交交渉”の思想史的背景と本質」は、以上の行論をまとめている。

宋遼両国間の関係を扱う従来の研究は、時事的・政治的な事情もあつたりして、近代的な外交関係の枠組みを投影した説明をしがちであった。本論文では綿密な史料の読解やこれまで注意されてこなかった事実の指摘によって、一見平和的な関係が常に緊張を孕むものであったことを明らかにした。部分的に史料の扱いになお改善の余地を残してはいるけれども、通説となってきた外国の先行研究における事実認定の誤りを、一次史料の分析に基づいて正した点は評価できる。序章における問題設定に比べて結論が禁欲的にすぎるところもあるが、これは奇を衒わず着実な叙述を意識したことによるものである。

よって、審査委員会は博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。